

趣味の散髪

加藤誓 (ちかい)

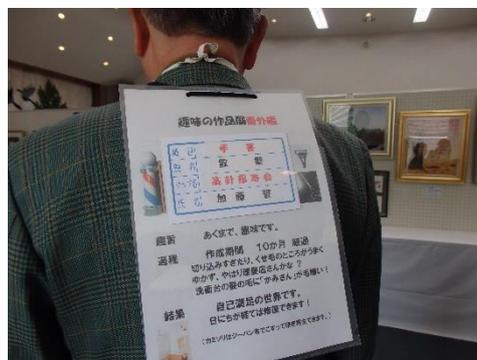
平成28年8月理事会の時、11月に名東区役所講堂で開催される「趣味の作品展」が議題となった。他の学区の理事の方々から、「高針は毎年素晴らしい作品が数多くあっていいね!」とお褒めの言葉を頂いた。



「いや、いや!」と言いながらも、誇らしく思った。「いや、待てよ。会員の皆さんのお陰で、私は一度も出品したことがない。」実は、図工は小さい時から苦手である。絵の下書きまでは、まあまあだが、絵具を塗るとだめになる。木工も設計図までは、そこそこだが、組み立てる段階で壊れてしまう。習字は中学の先生に芸術的な「型にはまらない書」を覚えてもらい、デタラメな字のままである。ましてや、手芸など、したことがない。

何か出品できるものはないか、考えた。「そうだ!自分で散髪を試みよう。いつも床屋さんの鏡でやり方を見ているからできるかも?」

まずは、三面鏡に映る頭の右左、前後の感覚を手で確かめるため、手で髪の毛を掴みながら買ってきた、すきまハサミで切ってみた。左右の感覚はつかめたが、前後の動きをつかむのが難しく細かいところ、特に剃刀は、難しかったが何とか出来た。女房に「どうかね!」「後ろがムラになっているよ!」どうも刈込みすぎたようだ。11月までまだ時間がある。このキャンバスは、時間が経てば元に戻る事が自慢?何回か修理を凝り返し、11月「第42回趣味の作品展」に「動く作品番外編」として出品することができた。



不思議そうに、じーと私を見ていたご婦人がいた。「剃刀はジーパン布で研ぐと再生できますよ。」と教えると喜んで去っていった。

だが、私の作品の評価は、悪ふざけと捉えられ、いまいちであった。

しかし、あくまでも趣味とは自己満足の世界であり自分としては「実利を兼ねた立派な作品」だったと思っている。

あれから5年、床屋さんには、申し訳ないと思っているが、ずうっと作品を作り続けている。

技術は、随分と上達をした。しかし、再生するキャンバスが変化をしてきた。

以前から白地を黒く染めてはいたが、その範囲が広がり、

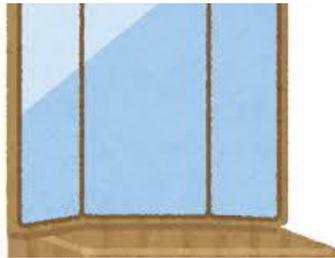
今は全体になったようだ。そして、キャンバスの前と

左右の切れ込みのところがだんだんと上がってきたのだ。

以前は、7：3に分けていたキャンバスが8：2になり、

今は、9：1で分け、前に少し垂らし上がってきた切れ込みを

隠すようになった。



「しわができるところまでが顔、それ以上は頭皮、ふけのところです、まだ毛根があるが、髪の毛がなくなったそこは、ふけも出ない。顔がデカくなったなあ。」

と嘆きながら、コロナ禍で暇な私は、毎朝、時間をかけ、念入りに「趣味の作品」の作成に取り掛かっている。

髪の毛に剃刀を当て、「ガッチリ固定・スーパーハード整髪料」で一心不乱にドライヤーセット……。なかなか、決まらない。「うーん、やっと決まった！」

突然、山の神の大きな声。

「洗面台の髪の毛をしっかりと掃除しといてね。小さな髪の毛がいつも散っているのよ。片付けるのが、大変だから。」「もう、いい加減、床屋さんへ行ってよ！」

